

ロンドンのモロッコ人コミュニティ

田 島 康 弘

(1995年10月16日 受理)

Moroccan Community in London

Yasuhiro TAJIMA

第1章 研究目的

本稿は、ロンドンのアラブ人社会の一部を構成するモロッコ人コミュニティについて、筆者が行なったききとりや若干の調査をふまえて、その実態をできるだけ明らかにし、そのかかえる諸問題やこれをとりまく諸状況について考察しようとするものである。

イギリスのマイノリティの諸問題全般については、日本語のものでも石田 (1988)¹⁾、安田 (1989)²⁾、富岡 (1985)³⁾ など既に一定の蓄積があるが、マイノリティの中でも少数派であるアラブ人については、イギリスでも研究が少なく、ようやく近年注目されはじめている状況にあり、こうした研究状況やアラブコミュニティ全体の概観について、先に筆者は報告したことがある⁴⁾。

また、アラブ諸地域からのヨーロッパへの移民と言えば、マグレブ3国とりわけアルジェリアからフランスへの移住者が圧倒的に多い⁵⁾ ことが知られており、彼らの実態や諸問題に関する報告もみられる^{6), 7), 8)} が、本報告でイギリスのアラブ社会をとりあげているのは、筆者のアラブへの関心と社会地理学の勉強をも兼ねたイギリス留学との接点であったからであり、他に大きな理由があるわけではない。しかし、英連邦移民を主体とするイギリスにおける、非英連邦人であるアラブ人の研究は、それなりの特殊性をもった興味深い研究対象であるとも言えよう。

さて、先の拙稿でも述べたように、イギリスのアラブ人社会といっても多様であるが、その特色の1つは、いわゆる難民が多いことである。しかし、本稿で扱うモロッコ人の場合はこうした一般的な傾向とは異なり、典型的な経済移民と言ってよい部類に属するものである。

筆者がこうした経済移民の特色をもつモロッコ人コミュニティに注目するのは、イギリスのアラブコミュニティの中で1つの典型的な類型をなすものと捉えているからで、これと正反対のもう1つの類型がイラク人コミュニティに見られるような難民としての移民のケースであろう。これら2つの類型に対し、エジプト人コミュニティの場合は、さらに多少異なる特色を持っているように

考えているが、これについては別稿で扱う予定である。

これら以外に、近年はイエーメン人⁹⁾、ソマリ人¹⁰⁾などの報告もなされてきており、アラブ人への関心が高まってきている状況にあると言えよう。

こうした中で、アラブ人自身の側の動きも活発になってきており、アラブ連盟とアラブクラブの共催によるアラブコミュニティの諸問題を議論する会議が開催されるようになってきた。その第1回は1990年、第2回は1993年に開かれており、今後も2年に1回開催することが決められている。

筆者は1993年6月から94年の4月まで、イギリスに滞在する機会を得たが、本稿はこの間に行なった調査を基にしている。調査は決して予期した通りにはすすまず、きわめて不十分な結果におわったが、熱心に協力して下さった方々もあり、また、数は少なくとも事態の一面は反映しているものと考えて、現在の段階で可能な範囲でまとめたものである。

第2章 モロッコ人コミュニティの概観

1. 従来の研究からみたモロッコ人コミュニティ

1) Ghada Karmi 女史の研究

モロッコ人コミュニティについては、Ghada Karmi 女史が1988年に調査を行なったと本人自身が語っている¹¹⁾が、その調査報告は未だ出版されていない(1994年1月末現在)¹²⁾。また、その調査の内容自体も、彼女がNational Health Serviceの医師であることの故か、健康・医療問題を中心にした調査だったようで、このことは、彼女自身「アル・ムハージル」¹³⁾のNo.17で、この調査の内容について、1. 健康、2. 病気、3. 生活への態度の3つを柱とした調査であると述べていることから推測される¹⁴⁾。ということは、この調査は移住の過程や移民の諸問題それ自体を中心とした調査ではないということであり、移民研究にとってどの程度有効なものであるか疑わしい面もある。

しかしながら、彼女が3人のフィールドワーカーの協力¹⁵⁾の下に、男女約半々の計71名の調査を行なったこと自体は高く評価されねばならないだろう。それは何よりもモロッコ人に対する調査自体が非常に困難だからである。この困難さについて彼女自身が語っている。すなわち、モロッコ人コミュニティの人々は、1) 秘密的であり、2) 非協力的であり、3) 疑心暗鬼的である。それ故、今までいく人かの研究者がモロッコ人コミュニティに足をふみ入れたが、みな途中であきらめたのである。また、「アラブでもあり、ムスリムでもある故、アラブやムスリムの社会について十分な知識をもっている私でさえむずかしかったのであるから、まして、ヨーロッパ人であつたらなおさらである」とも述べている。

何はともあれ、こうした彼女の調査によって、ノースケンジントンのモロッコ人コミュニティに関する、ある程度の基礎的な事実がわかってきたということが注目され、評価されねばならないだ

ろう。

調査の結果わかったこととして彼女自身があげているのは次の5点である。

- (1)モロッコ人は健康であること。
- (2)彼らの最大ののぞみは通訳と女医であり、とくに女医については、むしろ男性の方が自分の妻や娘のために望んでいること。
- (3)これに次ぐ望みはローカル・モスクの存在で、その理由は宗教は健全で健康な生活の基礎だからというものである。
- (4)さらに婦人は Social Club や hammam (public bath=公衆浴場) を望んでいる。これは婦人にとっては、たとえ仕事を持つ婦人であっても外の世界との交流がほとんどなく、孤立しているので、婦人の public life として重要だとしている。
- (5)以上のことは婦人のみでなく男性にも当てはまるということが5点目である。

これらの中でも(4)については、彼女自身が女性であるためかとくに強調している。すなわち、モロッコ人の女性たちは、二重の仕事、つまり1つは家庭内の domestic な仕事、もう1つは彼女らの仕事である家庭外の domestic な仕事¹⁶⁾ をしており、しかもこれらには援助や支えや同情すらないのであり、従って、彼女ら同士の交流や支えが必要なのであると。

また、調査の結果をふまえて、彼女は1つのアドバイスを打っている。すなわち、多くの者が将来の帰郷に関して態度があいまいであるが、もし、近い将来にはっきりした帰郷の予定を持たないのであれば、イギリス社会への適応を積極的に考えるべきであると。より具体的には、1) 言葉をきちんと習うこと、2) 非モロッコ人の友を持つよう努力すること、3) イギリス社会の諸制度や諸機会を利用、活用することなどにもっと努力すべきだと言うのである。

2) その他の研究

以上のべた Ghada の調査は、モロッコ人コミュニティを対象として行なわれたほとんど唯一の調査なので、やや詳しく紹介したが、これ以外にも、アラブコミュニティ全体にふれる記述の中で、モロッコ人コミュニティについてふれたものが2~3みられる。

その1つを紹介すると、例えば Camillia Fawzi El-Solh (1993)¹⁷⁾ は、モロッコ人コミュニティについて、以下の5つの諸特徴を指摘している。

- (1)モロッコ人は1950~60年代の英連邦諸国からの経済移民と同様に、イギリス労働市場の空隙をうめる形でやって来たこと。
- (2)仕事は、大部分がホテル及び「まかないの仕事」で、NHS (National Health Service) に従事する者も一部みられること。
- (3)技術を持たず、英語力もないので、最低の賃金分野にしかつせず、また、上昇の展望も持ち得ないこと。
- (4)60年代末から70年代初期にかけての移民入国制限の強化の時期に家族の呼び寄せを行なったこと。

(5)従って、それまでの一時的移民であったものが、以後、長期的定住に変化してきていること。

また Camillia は、モロッコ人がかかえる問題について、教育の低さと技術力の低さ、そしてこれらに起因する失業率の高さをあげ、さらに、帰郷の意志を持つ第1世代とイギリスで生まれ社会化した第2世代との間の緊張やあつれきを指摘し、これがムスリムアイデンティティ探究の方向をさし示していると述べている。

2. イギリスのモロッコ人協会と筆者のアプローチ

1) ロンドンの5つの協会

以上の報告は、専らロンドンのノースケンジントンに集中居住するモロッコ人に関する報告である。たしかに、ノースケンジントンはイギリスでモロッコ人が最も集住している地区であるが、この他にもいくつかの小さな集中居住地区があり、そこには協会など何らかの組織がつくられている。

そこで、モロッコ領事館の情報に依存して、これらの協会 (Voluntary Association) について把えてみると、こうした組織はイギリス全土で7つあり、そのうちの5つがロンドンに存在している。この5つのうちノースケンジントン地区内にある組織は2つだけで、その1つが Moroccan Information and Advice Centre¹⁸⁾ であり、もう1つが Al-Hassaniya Moroccan Women's Centre¹⁹⁾ である。両センターとも Golborne Rd に面していて、両者の事務所は互いに100mも離れていない。この両者は Gender の問題をめぐって、考え方の上で若干の対立があるとの指摘がなされている²⁰⁾が、双方に接触した筆者の印象では、相互の交流もあるようで、それほど深刻な対立があるようには思われなかった。

なお、Women's Centre の活動内容をセンターで発行している印刷物に依拠して若干紹介しておく対象はモロッコ人およびアラビア語を話す女性やその家族で、健康と教育の増進を目標としている。より具体的には、活動の中心となるセンターが設置され、婦人や子供のための英語教育、健康教育、通訳サービス、10代の女性を対象とした裁縫やししゅうなどの文化活動等が行なわれているのである。

残りの3つの協会のうちの2つは、ノースケンジントン地区からそれほど遠くないところに事務所を構えている。1つは Westminster Moroccan Widadia で、ノースケンジントン地区のやや北方にあり裏通りに面した入口から階段を下りてゆくと、地下にやや広いカフェがあり、その横の小さな部屋が事務所であった。カフェには、筆者が訪れる夕方にはいつもたくさんのモロッコ人男性がテーブルを囲み、雑談にふけったりカードプレイをしたりしていた。

もう1つは Westminster Moroccan Parents Association で、ノースケンジントンの東方に位置し、地下鉄の Edgware Road 駅の近くに事務所がある。但し、ここは独立した事務所ではなく、会長氏の自宅であった。

ロンドンにあるモロッコ人協会の最後の1つは、Moroccan Workers Association Widadia で、以上の4つがいずれもロンドンインナーシティの西部に位置していたのに対し、インナーシティの

東部、いわゆるイーストエンドに存在する。イーストエンドと言えば、現在はバングラデシュからの移住者が集住する地区として有名であるが、モロッコ人もその一部がここに集住しているのである。学生寮のような建物の2階の一室が、その事務所であった。

2) 筆者のアプローチ

筆者は、以上のすべての協会や組織に対し、筆者が作成したアンケートの調査・協力の依頼を行ったが、

(1)最後の2つの組織に対しては、何回か訪問したにもかかわらず、責任者には直接面会することができず、間接的な依頼になってしまったこと。

(2)また、3番目の Westminster Moroccan Widadia のように、責任者に直接面談し、協力の約束にも応じてくれたにもかかわらず、結果が伴わなかったこと。

などのため、調査は思うようには進展せず、結局、ノースケンジントンの2つの組織の代表者などの協力によって、11人の調査結果を得たにとどまった。従って、今回の調査によって得られたことから言えることは、きわめて限られていると言わざるを得ない。

しかしながら、回答を寄せて下さった11人の方々の存在、調査の過程で様々な協力をおしかなかった協会の責任者の方々、「アル・ムハージル」の編集長氏、心よく情報を提供して下さった領事館の方など、様々な方の協力を得ており、また、筆者の調査結果も一定の事実に基づくもので、これをまとめることも意味のあることと考えて、整理することにした次第である。

なお、ロンドン以外では、ロンドンの南方サセックスの Crawley に Moroccan Widadia of Crawley があり、また、スコットランドのエジンバラにも、Moroccan Workers Association Widadia of Scotland が存在するが、これらについては筆者は全く接触していない。また、かつてはロンドン北郊の St. Albans にも St. Albans Moroccan Widadia が存在したようである。

第3章 調査結果

筆者は、調査項目を整理したモロッコ人移住者個人に対する調査票を作成し、これを各協会・組織の代表や書記などの責任者の方に10部ずつ程度依頼し、後に回収に当たるという方法をとった。回収し得た調査票は、ほとんどノースケンジントンの2つの組織からのものであり、他の3つの組織からの回収は不可能であった。なお、使用した言語は英語のみで、アラビア語を併記することも考えたが、その必要はないとの被調査者側からのアドバイスも受けたので、アラビア語の併記は行っていない。

以下に、調査の結果を調査票の項目にはほぼ沿ってみてゆきたい。調査の内容は大別すると次の5点にわけられる。すなわち、1. 渡英時点のことについて、2. 渡英前のことについて、3. 現在の生活状況、4. 故郷との関係、5. 将来及びイギリス社会について、の5点である²¹⁾。

1. 渡英時点のことについて

1) 渡英の目的など

まず、被調査者がいつ渡英したかをみると、'70年代が最も多く、'80年代がこれに続いている(第1表)。とくに男性はほとんどが'70年代に渡英している。

つぎに、来住時における彼等の年齢をみると、10代後半の者が最も多く、これに20代前半を加えるとほとんど全員となる(第2表)。つまり、若い時に来ていることになる。

なお、ここで調査時点における彼等の年齢を付け加えておくと、20代が4名、30代も4名と多くの者が今なお20~30代であることになる(第3表)。

第1表 来住年

来住年	男	女	計
70年代	4	2	6
80年代	1	2	3
90年代		1	1
不明		1	1
計	5	6	11

第2表 来住時の年齢

来住時の年齢	男	女	計
10 ~ 14			0
15 ~ 19	3	3	6
20 ~ 24	1	2	3
25 ~ 29			0
30 ~ 34	1		1
不明		1	1
計	5	6	11

第3表 調査時点での年齢

調査時点での年齢	男	女	計
20 ~ 24	1	1	2
25 ~ 29		2	2
30 ~ 34		1	1
35 ~ 39	2	1	3
40 ~ 44			0
45 ~ 49	1		1
50 ~ 54	1		1
55 ~		1	1
計	5	6	11

以上を全体的にまとめてみると、被調査者の多くは1970~80年代に若くして渡英し、現在20~30歳代になっているとすることができよう。

つぎに、どこから来たのかをみると、フランスの1名を除いて9人がモロccoから直接来ており、このうちの6人は北西部の海岸都市ララッシュから来ていて、ララッシュからの者が多いと一般に言われていることと一致する(第4表)。また、この6人はいずれも'70年代に来ている。

何のために来たかの結果をみると、仕事の他に勉強のためという者も多く、これはとくに女性に多い(第5表)。また「親と一緒に生活するため」との答もみられたが、これは70年代以降のいわゆる「呼び寄せ」によるものであろう。

第4表 前住地

前住地	男	女	計
モロcco ララッシュ	4	2	6
カサブランカ	1		1
フェズ		1	1
メクネス		1	1
フランス		1	1
不明		1	1
計	5	6	11

第5表 来住目的

来住目的	男	女	計
仕事	2	1	3
勉強	1	3	4
親と一緒に生活するため	1	2	3
不明	1		1
計	5	6	11

次に、他の国でなくイギリスを選んだ理由をみると、「親がいたから」、「兄弟姉妹がいたから」、すなわち家族が既住していたとの答が多く、既住者の存在の影響が大きいことがわかる（第6表）。ここでは、既住者の方の渡英の理由は不明であるが、被調査者の多くが「呼び寄せ」移住者であることも推測される。

第6表 イギリス来住の理由

イギリス来住の理由	男	女	計
親が既住していたから	1	1	2
親と一緒に来た		2	2
兄弟・姉妹がいた	2		2
英語を学ぶため		2	2
英語が話せたので	1		1
イギリスで仕事が決まったので	1		1
イギリスが好きなので		1	1
計	5	6	11

そこで、被調査者の渡英時点での既住者の内容をみると、両親や兄弟など家族のいた者が半数以上と多かった（第7表）。また、他方では「親と一緒にイギリスに来た」という者も少なくない（第8表）。

第7表 既住者

既住者	男	女	計
両親	2	1	3
兄弟	2	2	4
友人	1	2	3
誰もいなかった		1	1
計	5	6	11

第8表 来住時のつれあい

つれあい	男	女	計
一人	4	1	5
親と一緒に	1	3	4
友人		2	2
計	5	6	11

2) 当初の居住と仕事

まず、はじめてロンドンに来たときの宿をどうしたかをみると、やはり家族に依存するケースが最も多かった（第9表）。また、その居住地はノースケンジントン以西のロンドン西部が最も多く

第9表 最初の宿

最初の宿	男	女	計
家族の家	4	3	7
友人の家	1	1	2
雇用主の家		2	2
計	5	6	11

「中心部」、「北部」に分類したものも含めてすべて、いわゆるインナーシティの部分に相当している（第10表）。また、ほぼ全員がその後居住地を変えている（第11表）。

第10表 来住当初の居住地

居住地	男	女	計
ロンドン西部	3	1	4
〃 中心部		2	2
〃 北部		1	1
オックスフォード		1	1
不明	2	1	3
計	5	6	11

第11表 居住地の変更

居住地の変更	男	女	計
Yes	4	6	10
No	1		1
計	5	6	11

次に、仕事をどのようにしてみつけたかをみると、こちらは家族に依存するものはそれほど多くなく、自分で探すケースが多い（第12表）。当初の仕事の内容は、Cateringと言われる給仕とかま

かないの仕事が最も多く、男ではコック、女ではハウスメイドがこれに続いている(第13表)。まさに、「技術が不要で英語力もさほど必要としない最低賃金の仕事」ということになろう。転職についてみると、職を変えていない者も3割程度いるが、これは安定というよりも他に職がないからと見るべきなのだろうか(第14表)。

第13表 当初の仕事

当初の仕事	男	女	計
コック	2		2
まかない仕事(ホテル, レストラン)	2	2	4
ハウスメイド		2	2
受付		1	1
学生		1	1
不明	1		1
計	5	6	11

3) 渡英時の諸問題

来住当初に直面した問題は、第1は言葉であり、ついで社会への対応であった(第15表)。そこで言葉の問題についてさらにみると、入国時における英語能力では

「全くなし」が断然多く、「少し」を加えると大部分を占める(第16表)。また、この英語能力は、とくに男性で弱い傾向がみられる。これは、女性は来住時の年齢が若く、勉学目的で来た者が多いことなどを反映しているからかも知れない。英語能力取得の努力は全員が行なったと答えているが、その形態では、「英語学校へ通った」とする者が最も多かった(第17表)。

第16表 入国時における英語能力

英語能力	男	女	計
全くなし	4	3	7
少し		2	2
中程度	1		1
十分ある		1	1
計	5	6	11

第12表 職探しの方法

職探しの方法	男	女	計
自分で探した	1	3	4
来る前に手紙で決定	1	1	2
来てから手紙を書いた		1	1
レストランを訪ねた		1	1
職業斡旋業者を訪ねた	1		1
家族に頼んだ	2		2
友人に頼んだ	1		1
学生		1	1
不明		2	2
計	5	6	11

第14表 仕事の変更の有無

仕事の変更	男	女	計
Yes	3	3	6
No	1	2	3
学生		1	1
不明	1		1
計	5	6	11

第15表 当初の困難

当初の困難	男	女	計
言語	4	5	9
宗教		1	1
社会への適応	5	1	6
その他			0
なし		1	1
計	9	8	17

注) 1人複数回答による。

第17表 英語能力の改善努力

改善の努力	男	女	計
英語学校へ通った	4	5	9
仕事の中で努力	2	1	3
その他(TV, 新聞, 本など)	3	0	3
計	9	6	15

注) 1人複数回答による。

2. 渡英前のことについて

1) 誕生地

被調査者の誕生地は、彼らがロンドンへ来る直前の居住地とほぼ同じであった（第18表）。すなわち彼等は生まれてからロンドンに来る直前まで、誕生した土地で育ったということであろう。

2) 国での仕事

国での仕事について尋ねた結果をみると、彼等の渡英時点での若さを反映して、多くの者がまだ職につく前の学生であった。既に職に就いていた者では、2名の男性が農業関係者であることがやや目立っていると見えようか（第19表）。

3) 移住の経験

これまでの移住の経験の有無についても尋ねたが、若い者が多かったせいか、全員が「なし」であった。

3. 現在の生活状況

1) 仕事

被調査者の現在の仕事は、多様であるといか言いようのない結果であるといえよう（第20表）。はじめは、まかないの仕事（Catering）が多かったが、近年はこうした分野の仕事でさえ少なくなっていることの反映であろうか。ちなみに、彼等の一週間の総労働時間をみても、40時間以上のフルタイム労働に就いている者は2名にすぎず、全く職のない失業者や、事実上半失業的状态にある者が少なくないといえよう（第21表）。

第18表 誕生地

誕生地	男	女	計
モロッコ	4	2	6
ララッシュ			
カサブランカ	1		1
メクネス		1	1
フェズ		1	1
不明		1	1
フランス		1	1
ツーロン			
計	5	6	11

第19表 国での仕事

国での仕事	男	女	計
学生	3	4	7
農夫および農業労働者	2		2
秘書		1	1
主婦		1	1
計	5	6	11

第20表 現在の仕事

職業	男	女	計（仕事の内容）
自営	1	1	2（通訳、ペンシヨナー）
私企業雇用者	2	1	3（コック、書店員、受付係）
公共サービス雇用者	1	1	2（不明、受付係）
その他	1	2	3（失業中、主婦、協会の仕事）
不明		1	1
計	5	6	11

第21表 労働時間

週労働時間	男	女	計（仕事の内容）
0～7	1	3	4（失業者2、学生1、年金生活者1）
8～15			0
16～23	1	1	2（通訳、協会の仕事）
24～31	1		1（不明）
32～39	1	1	2（書店員、受付係）
40～	1	1	2（コック、受付係）
計	5	6	11

2) 家庭

まず、被調査の結婚した年をみると、男性では'70年代以降に多く、女性では未婚の独身者も目立つ(第22表)。次に、これらの者の結婚した場所をみると、'70年代頃まではモロッコであったものが、'70年代以降はロンドンへと変わってきており、生活拠点の移動がみられるように思われる。さらに、配偶者の出身地では、やはりモロッコそれもララッシュが多いが、イギリス人との結婚がみられることも注目されよう(第23表)。子供については、既婚世帯9世帯中、子供のいる世帯は6世帯で総数は19名であり、平均2.1人と少子傾向にあると言えようか。なお、19名中モロッコ生まれは4人、イギリス生まれが15人で、子供の8割近くがイギリスで生まれている。

第22表 結婚年

結婚年	男	女	計
1940-49		1	1
50-59			0
60-69	1		1
70-79	2		2
80-89	1		1
90-	1	1	2
不明		2	2
独身		2	2
計	5	6	11

第23表 配偶者の出身地

配偶者の出身地	男	女	計
モロッコ ララッシュ	2	1	3
タンジール	1		1
ウンザネ	1		1
メクネス		1	1
イギリス ロンドン	1		1
スウィンドン		1	1
不明		1	1
独身		2	2
計	5	6	11

3) モスク及びモロッコ人協会について

被調査者の中で定期的にモスク²²⁾へ通っている者はそれほど多くなく、とくに女性では通わない者の方がずっと多かった(第24表)。また、モロッコ人協会の会員であると答えた者は2人だけで、会員でないという者の方が多かった(第25表)。そこで、この協会に対する意見を尋ねたところ、「特にない」とする者が大多数で、この協会に対する関心が一般にうすいようであったが、一方で、「大変助かっている」という肯定的な意見があった反面、「協会は活動をしていない」とか「労力のむだである」という否定的な意見もあった。

4) 現在の生活の中での不満について

日常生活の中での不満や、問題と感じていることをみると、「天気」という答が最も多かった(第26表)。これは快晴の少ないロンドンの天気のことを指し、アラブやモロッコの人達との会話の中で、彼等が冗談まじりにこれにふれることを筆

第24表 モスク礼拝

モスク礼拝	男	女	計
Yes	2	1	3
No	3	4	7
不明		1	1
計	5	6	11

第25表 協会会員

協会会員	男	女	計
Yes	1	1	2
No	4	3	7
不明		2	2
計	5	6	11

第26表 日常生活における不満

不満	男	女	計
天気	2	1	3
人種差別	2		2
失業	2		2
若者の無目標、犯罪	2		2
言葉	1		1
大気汚染		1	1
計	9	2	11

注)一人複数回答による。

者も何度か経験しているが、自然現象であるので致し方のないことであろう。ほんとうの問題は、次の「人種差別」、「失業」、および「若者の無目標・犯罪」あたりにある。モロッコ人社会のかかえる問題として一般に言われていることが、ここにもそのまま反映されている。

4. 故郷との関係

1) 故郷にいる家族

被調査者の故郷との関係を見る前に、彼等の家族や近い親戚のうちの誰が故郷にいるのかをみると、親（すなわち両親または父か母のいずれか）が故郷にいるものが少なくとも4人いる（第27表）。被調査書のうち5人は

第27表 モロッコに住む家族等

家 族 等	男	女	計
父	1	2	3
母	2	2	4
兄 弟	2	3	5
姉 妹	3	2	5
その他(祖母,息子,おじ,おば)	3	2	5
計	11	11	22

注)一人複数回答による。

ロンドンで両親と一緒に居住しているのに、これ以外の者については、ほぼ故郷に親がいると推測される。また、兄弟や姉妹、その他を故郷にもつ者はもちろん少なくない。すなわち、彼等のうちの約半分が両親を国に残しており、また、兄弟や姉妹等がいることになる。

2) 帰国

帰国の頻度をみると、年1回が最も多く、年2回がこれに続いていて、ほとんど全員が年1回以上帰郷している（第28表）。帰郷の頻度はかなり高いと言うことができよう。ききとりによれば、彼等は毎年夏になると、車をつらねてフランス・スペイン経由でモロッコに帰郷するそうで、これを報道するアラビア語の記事が「アル・ムハージュール」の第2号（1992年10月10日）にも掲載されている。

第28表 帰国の頻度

帰 国 の 頻 度	男	女	計
3 ~ 4 回 / 年		1	1
2 回 / 年	1	2	3
1 回 / 年	3	2	5
1 回 / 2 年	1		1
不 明		1	1
計	5	6	11

3) 仕送り

仕送りをしている者は被調査者の中の半数弱であるが、これは故郷における両親の存在と対応しているように思われる（第29表）。この他、品物を送ることも半数近くでみられ、その物品は衣類、本、テレビ、ビデオ、カメラなどであった（第30表）。

第29表 仕送りの有無

仕送りの有無	男	女	計
Yes	2	2	4
No	3	3	6
不 明		1	1
計	5	6	11

4) 故郷との連絡

手紙や電話による故郷との連絡の頻度をみると、家族がこちらにいたので「連絡はしない」という3名を除くと、少なくとも年に数回は連絡をとっており、このうち半数は月に数回連絡をとりあっていて、連絡が密になさ

第30表 贈答品の有無

贈答品の有無	男	女	計
Yes	3	2	5
No	2	3	5
不 明		1	1
計	5	6	11

れていると言えよう(第31表)。全体として、両親などを国に残している場合には、帰郷や連絡など故郷との結びつきが強いとすることができよう。

5. 将来の展望およびイギリス社会について

1) 将来の展望

将来の帰郷の意志について尋ねた結果をみると、「国に戻りたい」とする者の方が多く、とくに女性にこの傾向が強い(第32表)。これは、彼女らのイギリスでの滞在期間がそれほど長くなく、確固とした生活基盤を築きあげていないからかも知れない。これに対し、滞在期間がより長く、結婚もし、子供もできて、生活基盤を築きつつある男性の場合に、定住の傾向がより強くみられるのであろう。

そこで、定住しようとする者の理由をみると、

- (1) 主要な家族が既にこちらに居住している。
- (2) 国に帰っても住む家がない。
- (3) モロッコでは社会福祉制度が不十分である。

などがあげられている。逆に、国に戻りたいとする者の理由をみると、

- (1) モロッコの生活様式の方が好きである。
- (2) 故郷は恋しく、なつかしいふる里である。
- (3) イギリスではムスリムへの敵意が増大している。

などをあげている。

全体として、定住傾向が生まれ、定着しつつあることに注目すべきであろう。

次に、人生の目標について尋ねた結果をみると、女性の場合には、この問いに対してほとんど答えていないということが1つの傾向である(第33表)。また、男性の場合も、「自分の仕事の確立」がやや多かったほか、「良き家庭を築くこと」、「神の教えのさとり」など様々であった。

2) イギリス社会に対する意見

最後に、イギリスの生活を体験する中で、良かったこと、及び悪かったことについて、それぞれ尋ねた。良かったこととしては、

- (1) チャンスが与えられている民主的な社会である。

第31表 手紙(電話)による故郷との連絡

連絡の頻度	男	女	計
1～4回/月		3(2)	3(2)
2～4回/年	4(1)		4(1)
しな	1	2	3
不		1	1
計	5(1)	6(2)	11

()内は電話で連絡

第32表 将来の意志

将来の意志	男	女	計
イギリスに留まる	3		3
モロッコに戻りたい	2	4	6
不		2	2
計	5	6	11

第33表 人生の目標

人生の目標	男	女	計
自分の仕事の確立	2		2
よき家庭を築くこと	1		1
神の教えのさとり	1		1
世界各国に行ける能力		1	1
まだはっきりしていない	1		1
不		5	5
計	5	6	11

(2)うまくやればがんばれば、成功する社会である。

(3)イギリスでの労働の経験が将来役に立つ。

(4)英語の修得にはよい。

などであった。他方、悪かったことの方はあまりなく、

(1)快晴の日が少なく、天候が良くない。

(2)イギリス社会に住むと孤独になる。

などがあげられた程度であった。

さらに、イギリス社会そのものに対する意見を求めた結果をあげておこう。

まず、プラス的な意見としては、

(1)全般的に良い社会である。

(2)イギリス人は控え目である。

(3)イギリス社会は上流社会である。

などが指摘された。また、中間的な意見としては、

(4)モロッコとは異なる社会だが、中味を知るにつれてだんだん慣れてくる。

(5)モロッコとは異なる社会で、イギリス人の様には行動できない。

などがあげられ、マイナス的な意見としては、

(6)イギリス社会は原理のない社会である。

(7)イギリス社会は組織されておらず、混乱した社会である。

(8)イギリス社会はたいくつな社会である。

などの指摘があった。

第4章 まとめと若干の考察

以上の調査結果を簡単に整理し、若干の考察を加えておこう。

1) 被調査者の多くは、1970年代から80年代にかけて、彼らが10代後半から20代前半くらいの年齢のときに、モロッコのララッシュからロンドンに移ってきた。このうちとくに女性は、主に80年代に勉学の目的で来た者が多かった。

ここで、被調査者の特性についてあらためて考えてみると、70年代に来た者には移民第1世代の経済移民的性格がみられる者もいるが、全体的には、70年代前半の移民制限政策による「呼び寄せ」移民的傾向が強いように感じられる。それは1つには、ロンドンでの既住者に親がいた者もいるということ、また、移住前のモロッコでは学生だった者が多かったことなどから、「呼び寄せ」移民的傾向がうかがえるからである。また、70年代前半の移民制限政策は、被調査者の結婚した場所にも反映しており、それ以前はほとんどモロッコで結婚式がなされていたものが、それ以後はほとんどロンドンで行われるようになって来ており、その結果、イギリス生まれの子供が、被調査者のか

かえる子供総数の8割近くを占めるに至っている。

2) 被調査者のロンドンでの居住地は、インナーシティの中西部で、モロッコ人最大の集住地区と言われるノースケンジントン地区周辺と言ってよい。仕事は当初のまかない業(Catering)から、近年は多様化あるいは失業化とも言うべき方向に変化しており、この背景の1つである英語力の低さの克服への努力がなされている。

3) モロッコ人は、彼らのコミュニティの外部との交流が少ないことが一般に指摘されているが、アラブ人内部やモロッコ人内部の交流について被調査者の場合をみると、モスクへ通う者は多いとは言えず、また、モロッコ人協会のメンバーである者もそれほど多くはなく、こうした面ではモロッコ人内部の交流も、必ずしも積極的であるとは言えない。

しかしながら、前述の2つのセンターや労働組合を中心とした活動はかなり活発であり、他方、被調査者の家族内での結びつきの強さも、居住や「呼び寄せ」などを通して目立っているように感じられる。

4) 被調査者が直面していた問題は、差別や失業であり、さらに、若者や第2世代の者たちの目標のなさや犯罪であった。これらはモロッコ人コミュニティ全体で一般に指摘されている問題そのもので、とくに第3の若者の問題の深刻さが強調され、アイデンティティーの確立の議論やとりくみへと発展している。

この問題は、「多文化・多民族社会」と自らの社会を規定している²³⁾イギリス社会にとっても、最も基本的かつ本質的な問題として捉えるべき問題であろう。

5) 被調査者の故郷との関係についてみると、家族のほとんどが既にロンドンで居住しているケースも少なくなかったが、父母、兄弟などの家族が故郷にいる場合、彼等との結びつきは帰郷や連絡の頻度をみても、非常に強いということが言える。そして、この傾向は3)の最後で指摘した家族内での結びつきの強さとも軌を一にしている。

6) 被調査者の将来について考えてみると、とくに女性の場合には帰郷の希望者も多かったが、全体としては、イギリスでの定住化、定着化が始まってきていること、言いかえると、現在は定住化の初期の段階にあると言えるように思う。このことは4)の第2世代の問題とも関連し、インテグレーションのあり方の問題としても議論されてゆくことになるだろう。

7) 被調査者のイギリス社会に対する見方は既して肯定的であった。これは、彼等の一部が定住化の方向性をもっていることが、イギリス社会の側の移民政策の中の長所の側面が好意的に受けとめ

られているからかも知れない。しかし、これら以上に、モロッコ人コミュニティ内での諸活動や諸運動²⁴⁾が、彼らの将来に展望を与えているという側面も、見落とすことはできないだろう。

注

- 1) 石田玲子 (1988): イギリスにおける英連邦移民政策の展開 (上) (下)。歴史学研究, No.582, 583。
- 2) 安田信之 (1989): イギリスのマイノリティ問題。アジア経済30-6。
- 3) 富岡次郎 (1985): 現代イギリスにおける人種問題。磯村英一編『現代世界の差別問題』(明石書店) 所収。
- 4) 拙稿 (1992): イギリスにおけるアラブ人の SEGREGATION。アジア・アフリカ研究, 32-4 (No.326)。
- 5) 前掲注4), 後掲注7) など。
- 6) 宮治美江子 (1983): パリのアルジェリア人移住労働者家族の適応と社会的ネットワーク。民族学研究 48-3。
- 7) 宮島喬 (1988): ヨーロッパにおける移民労働者問題の変容と現状—フランス社会とマグレブ移民の問題を中心に—。歴史学研究, No.581。
- 8) Alec G.Hargreaves (1991): The political mobilization of the North African immigrant community in France. *Ethnic and Racial Studies* 14-3.
- 9) Fred Halliday (1992): *Arabs in Exile: Yemeni Migrants in Urban Britain*. I.B. Tauris.
Fred Halliday (1992): *Yemeni workers' organisation in Britain*. *Race & Class*, 33-4.
- 10) Haolani Ditmars (1994): *Somalis: the refugees and the city*. Independent London, 29 September 1994.
- 11) Ghada Karmi (1991): *The Arab Community and British Public Life*. in "Arabs in Britain" p31.
- 12) 新聞「アル・ムハーヅル」第2号 (1992年10月) にも出版される旨の記事が掲載されたので、筆者は直接編集長にたしかめたが、1994年1月段階でも出版されていないとの返事であった。
- 13) この新聞はモロッコ人コミュニティ内の有志によって、1992年8月に創刊された新聞で、月に1~2回発行されている。編集長はモハメッド・アスー氏で、アル・ムハーヅルの意味は The Immigrant (移民) であり、文字は英語とアラビア語が半分ずつぐらいである。
- 14) この新聞のNo.14からNo.17までに、Ghada 女史は自己の調査の概要を連載している。なお、No.14については筆者は未見である。
- 15) 協力者を依頼した理由について、1つは彼女の出身であるマシュリブ方言とマグレブ方言とが異なること、もう1つは、モロッコ人の文化や社会的背景の理解に有利であることの2点をあげている。なお、彼女はパレスチナ人である。
- 16) モロッコ人女性の仕事の多くは、ホテルやレストランでのまかない仕事 (Catering) であり、従って仕事は室内であり、また孤独であるとも言われる。
- 17) Camillia Fawzi El-Solh (1993): *Arabs in London*. in "The People of London" Nick Merriman ed.
- 18) モロッコ人コミュニティの側の要請に基づいて、1989年に Royal Borough により作られたものであるが、行政側とコミュニティ側とで、センターの管理・運営をめぐる弱干の対立が報告されている。「アル・ムハーヅル」No.4 (1993年2月1日号)。
- 19) Centre としては、1992年1月16日に正式発足したが、この前身の Moroccan Women's Project は1986年に発足していた。センター発行の印刷物による。
- 20) Camillia Fawzi El-Solh (1992): *Arab Communities in Britain: Cleavages and Commonalities*. I. C. M. R. 3-2.
- 21) なお、被調査者名の記入については、差し支えない限り書いてもらう形式をとったが、記入者は、男1名、女2名の合計3名で、予想以上に少なかった。これは、Ghada Karmi が指摘するような、調査に対する一定の警戒心、またはプライバシー権の主張を示すものかも知れない。
- 22) 通っていると答えた者が行くモスクは、リージェントパークモスクである。

- 23) 長谷安朗(1990): 第三世界からの移民・出稼ぎ労働者—イギリスの対応・日本の対応—。地理35-4。
24) ノースケンジントンにおける前述の2組織の活動や彼等の新聞の発行の動きなどは、その代表的なものと言えよう。

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、筆者の受入れ機関であった L. S. E. の先生方、調査の拠点となった SOAS の方々をはじめ、AL-MUHAJIR の編集長の Mohamed Assou 氏、Moroccan Information and Advice Centre の Director, Zadian 博士、Al-Hassaniya Moroccan Women's Centre の karima koia 氏、モロッコ領事館の Korri 氏には、調査の便宜や御協力で大変お世話になった。また、モロッコ人コミュニティの何人もの方々が筆者のアンケートに協力して下さった。以上の方々に心から厚く御礼申し上げます。

ABSTRACT

This study surveys the actual condition of Moroccan community in London and consider the problems they face nowadays. Moroccans in London are typical economic migrants, although Arab communities in London include many refugees among them as a whole. This survey were conducted during my stay in London from June 1993 to April 1994. The results of my study are the followings.

- 1) Most of the respondents came to London from Larache in northern Morocco in the 1970s' or 1980s', when they were in their teens or the first half of twenties'.
- 2) Most of the respondents were the people who had been called by their families in London after migrant restriction policy in the begining of the 1970s'.
- 3) The respondents have lived in North Kensington and its vicinity and they were engaged in various kinds of labour or unemployment.
- 4) Major problems which the respondents were confronted with were aimless life and crime in youth, in adition with discrimination and unemployment.
- 5) Although many women hoped to go back to their home country, the respondents as a whole wanted to live in Britain from now on. They begin to settle down in Britain, so it will be discussed among them how to integrate to British society.